
四十九日

北條 とき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四十九日

【Nコード】

N2900H

【作者名】

北條 とき

【あらすじ】

お父さんが、言った。「俺はまだお前を許したわけじゃないからな」若い二人は、許されるのか。家族の絆とは、何なのか。

プロローグ

プロローグ

小学校低学年の時に、

「お父さんやお母さん、お兄ちゃんやおねえちゃんなど、家族のだけれかについて作文をかきましょう。」

という宿題を出されたことがあった。そして書いた作文は、授業参観の日に保護者たちの前で一人ずつ朗読しなければならなかった。

私以外の女の子はほとんどがお母さんについて書いて書いたが、私はお父さんのことを書いた。

それは特別お父さんが大好きだったからではなく、私にとって「家族」とはお父さんしかいなかったからだ。

お母さんのことは、うつすらとしか記憶に残っていない。私が幼稚園で無邪気に遊んでいた頃に両親は離婚し、お父さんが私を引き取った。お母さんについて憶えていることといったら、四歳の誕生日に珍しく家族全員で夕食を食べたことくらいだ。その日、私はもちろんお母さんも、そしてお父さんすらも、とにかく笑ってばかりいたことが今でも目に焼き付いている。

離婚まで私の面倒を見ていたのは専らお母さんだったのに、私の中の「お母さん」はなぜか四歳の誕生日にしか存在しない。その時以外の記憶を掘り起こそうと、お母さんについてお父さんに訊ねても、お父さんは機嫌が悪くなるだけで何も喋ろうとはしなかった。

さて、お父さんについて書いた私の作文だが、これが先生に大絶賛されたのだ。確か、自分にはお母さんがいないが、別に寂しくはない。なぜなら、お父さんがいつもそばにいてくれるからだというふうなことを書いた気がする。

私の朗読を聞いた後、お父さんを大切にしてくれ、と言って先生は私の頭をそつとなでた。いかにも子供を好きそうな、中年のその女の

先生は、涙すら目に浮かべていた。その先生がよっぽど涙もろかったのか、それとも私が大人の心をくすぐるのが上手かったのかはよくわからない。

先生に褒められ、まんざらでもないという気持ちで家に帰った私を待っていたのは、私以上に上機嫌なお父さんだった。

お父さんは他の子のお父さんよりもずっと年上で、それがなんとなく恥ずかしかったから授業参観のことはお父さんに秘密にしていた。だがお父さんは机の下に隠していた。授業参観のお知らせをめざとく見つけ、仕事を休んでまで授業を見に来たのだった。

帰宅した私を見るなりお父さんは私の頭を掴み、

「今日の作文、よかったぞ。どれ、もう一回見せてみる」

と笑顔で私に迫った。こんなに嬉々としたお父さんを見たことがほとんどなかったなので、私はきょとんとして、素直に作文を渡してしまった。

その晩、お父さんは普段あまり飲まないビールをたくさん飲んだ。私はあまり親しくない親戚のおじさんを見るような目で、赤くなった頬を眺めていた。するとお父さんは誰に言うでもなくぽつりと呟いた。

「智美にそう言ってもらえるようになったのは、あいつと別れたおかげかもな」

聞いてはいけないことを聞いてしまった気がして、私は喉を鳴らしてオレンジジュースを飲みほした。

お父さんが私の面倒を一生懸命見てくれたのは、もちろん私に好かれるためではなかっただろう。むしろ時としてこちらが迷惑に感じるほど、お父さんは必要以上にいろいろとしてくれた。

「健康な身体はいい食事からだ」

とかなんとか言って、栄養バランスのいい食事を毎日作ってくれた。中学校からは給食ではなくてお弁当だったので、見た目・栄養・味の三拍子揃ったお弁当を作って私に持たせた。

お弁当の時間、

「これお父さんが作ってくれたんでしょ？すごい」

と友達に言われる度に、私は嬉しいような恥ずかしいような、何とも言えない気分になった。

ある日夕食を食べているときに何気なく、

「今日のお弁当すごくおいしかったよ。友達からの評判もよかったし。色あいとかもきれいだった」

と言ったことがあった。

それを聞いたお父さんは、くぐもった声で

「そうか」

とだけ答えた。だが私は、お父さんが顎に生えた髭を手でなでているのを見逃さなかった。お父さんが、照れたときに見せる癖だ。

次の日、さあお昼だと弁当箱を開けると、おせち料理顔負けの超豪華な料理が弁当箱狭しと詰め込まれていた。昨日褒めてくれた友達もそれを見て、

「きよ、今日もすごいね・・・」

と苦笑いするほかなかった。

それ以来、私は二度とお弁当のことでお父さんを褒めないことにした。

お父さんは以前高校の英語教師をしていたが、離婚してしばらく経ってからは県の教育委員会で教師の卵を指導するようになった。

お父さんの話によると、高校で教えていたころの方が断然忙しかったらしい。給料のことはよく知らないが、

「今も昔も安月給だ」

とよくこぼしていたので、私はできるだけ家計に響くようなことはしないように気をつけた。

家事などは二人で分担してやっていたし、授業参観や運動会には必ず仕事を休んで駆けつけてくれた。他人に言わせれば「とてもいいお父さん」だ。しかし私にしてみれば、必ずしも良い面ばかりではなかった。

小六のころ、両親が離婚したことやお父さんが他の子のお父さん

よりも老けているという理由で、クラスの男子にいじめられたことがあった。私はお父さんを心配させたくなくて黙っていたが、担任の先生がお父さんに電話でいじめのことを話してしまったのだった。電話を切ると、お父さんは

「誰にいじめられているんだ？」

と低い声で私に訊いた。いつになく真剣なお父さんに圧倒され、私は主犯の男の子の名前を告白してしまった。その子は幼稚園も一緒だった子で、お父さんも名前だけは知っていた。

「あいつか……」

と鬼の形相でつぶやき、お父さんは卒園アルバムでその子の家の住所を調べるとすぐに家を飛び出していった。

お父さんがただならぬ殺気を漂わせていたので心配になり、私も少し遅れて家を出た。

幸いその子の家はそう遠くなく、昔何度か遊びに行ったこともあったので、私はすぐにお父さんに追いつけるだろうと思っていた。だが私がその子の家に着いたときは時すでに遅く、お父さんにボコボコにされた男の子が地面に転がっていた。

人形のようになってしまうたいじめっ子の両親が、まだ鼻息を荒くしているお父さんを必死で抑えつけていた。

「お父さん！ 一体何してるのよ！」

開口一番私が怒鳴ると、

「おう、智美。こいつにもお前の痛みを思い知らせてやろうと思っ
てな」

と大真面目な顔をしてお父さんは答えた。

こんな奴が教師を育てているからきつと日本の教育はだめなのだろう、と幼かった私は悟った。私は馬鹿な男から視線を外し、男の子の両親に謝って事情を説明した。すると今度は彼らが男の子を怒り始めた。男の子のお父さんは、女の子をいじめるとは何事だと怒鳴り、お母さんは泣きながらその子をビンタした。男の子の顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっていた。

結局男の子は私のお父さんにやられたせいで入院一日、全治一週間の怪我を負った。しかし私とお父さんはその子の両親にひたすら謝られ、うちは治療費もほとんど払わずに済んだ。

後日両親だけでなく、いじめていた男の子も私に謝りに来た。むしろこっちが謝りたい気分だったが、お父さんは

「俺はまだお前を許したわけじゃないからな」とわけのわからないことを言っていた。

それから私に対するいじめはなくなったが、代わりに

「あいつの親父は恐ろしい」

という噂が私の学年じゅうに流れ、みんな私に対してなんとなくよそよそしい態度をとるようになってしまった。

確かにあんなに怒ってくれたのは少し嬉しかったが、それにしてももう少し大人らしい対応はなかったものかと今でも思う。

中学、高校を経ても過保護なバカ親っぷりは変わらず、何度も私を困らせてくれた。父親が厄介を起こす上にお母さんがいないという家庭環境で、よくグレなかったものだと自分で自分を褒めてあげたいくらいである。

変な父親に育てられた哀れな私だが、私自身は至って真面目な、普通の人間に育つことができた。単に自覚がないだけとかではない、と思う。

とりあえず今まで生きてこられたことに関してはお父さんに感謝している。

1章

1

「何見てるの？」

小学校の卒業アルバムから顔を上げて後ろを振り返ると、トイレに行っていた健太郎が部屋に戻っていた。ふすまを閉めるその手は、まだ水で濡れている。

「ちよつと！手を洗ったらちゃんと拭きなさいっていつも言ってるでしょ！洗面所にタオル置いてあるんだから」

「ごめんごめん。他人ん家の物って勝手に使うのなんか申し訳なくてさ」

健太郎が後ろからアルバムを覗き込み、おお懐かしい、と声を上げる。

「床が濡れてる、って前にお父さんも不審がってたよ。その時はごまかしておいたけど、本当のこと言いつけちゃおうかなあ」

「また殴られるのは嫌だなあ。あの時は怖かった。俺にその恐怖を思い出させたくてアルバム出してきたの？」

もちろん冗談だろうが、半分本当に怖がっているのだろうか、若干顔がひきつっている。

「まさか。ただ単に見たくなっただけ」

だよなあ、と安堵して健太郎が私の隣に腰かけた。

健太郎とは4年ほど前から付き合っている。小学校六年生のときに私をいじめ、そしてお父さんにボコボコにされたのはまぎれもなくこの男である。

健太郎とは幼稚園、小学校、中学校が同じだった上、中学では三年間ずっと同じクラスだった。しかし例の事件以来健太郎は私と全く関わりうとしなくなり、私の方も話しかけづらかったというのもあって、ほとんど会話らしい会話のないまま中学校を卒業した。

健太郎は県でもかなり上のレベルの高校に、私はこれといった特徴のない中堅の高校に進学した。高校時代は地元の駅でたまに姿を見かけたが、お互いに話しかけることはしなかった。

お父さんによって断たれた私たちの関係が急激に修復、さらには恋愛という形にまで発展するようになったきっかけは、成人式の後のクラス会だった。

成人式で久しぶりに中学校時代の友達と再会し、式の後三年生の時のクラスでクラス会が催されることになった。一次会は地元の居酒屋で行われ、くじで席が決められた。その時私の隣に座ったのが健太郎だったのである。

隣どうしである以上話さないわけにもいかず、私たちは七、八年ぶりにまともな会話をするはめになった。

まずはお互いに近況を報告しあったが、これがどうにも盛り上がらない。私は高校卒業後すぐに郵便局に就職したのに対し、健太郎は大学に進学していたのである。私は大学生の事情なんてよく知らないからどんな話を振れば盛り上がるのかわからないし、向こうも社会的な会話というものを心得ていなかった。

「大学でどんな勉強をしているの？」

「高校の英語の先生になりたいからそのための勉強をしているよ。いわゆる教職課程ってやつ」

「へえ」

「郵便局員ってどんな仕事？」

「事務とか受付とか。普通のOLとそんなに変わらないよ」

「へえ」

共通の話題というものがなく、どちらか一方の話聞いて「へえ」と言うだけの繰り返しだった。

濡れた雑巾を絞っているうちに滴る水滴がだんだん少なくなり、やがて全く水滴が落ちなくなるように、すぐに私も健太郎も考え付くだけの話題を絞りきってしまった。

そつえば「へえ」と言うボタンを押しまくるテレビ番組が昔

あつたな、と私がぼんやり考えていると、彼が恐る恐るといった感じで口を開いた。

「あの……お父さん元気？」

お父さんに関する話題は彼にとって地雷のようなものだと思っていた私は、「まさか自ら地雷を踏むとは」という驚きを隠しきれず、すぐに返事を返せなかった。

「えつまさか…何かあったの？」

「ううん、元気元気！もう困っちゃうくらい元気だよ」

「それならよかった。すぐ元気だったもんね、鈴木さんのお父さん」

「ま、まあね。ていうか…お父さんの話題大丈夫だったの？」

「大丈夫って？」

「いや、だから…私はてつきり、五十嵐くんに私のお父さんの話題を振ったら昔の傷が疼きだして、それでもってアレルギー症状みたいなのが出てくるかなと思ってたんだけど…」

健太郎は私の顔を見て一瞬ぼかんとすると、次の瞬間お腹を抱えて笑いだした。

「疼くって…アレルギーって…何だよそれ！鈴木さん面白いね」

盛大に笑われ、私は耳が熱くなってくるのを感じた。健太郎の笑い声に反応してこちらを見てくる人もいる。

「いや、あの…私てつきりお父さんと一緒に五十嵐君に恨まれているんじゃないかと思ってたんだけど…」

「いくらなんでも俺はそこまで執念深くないよ。それに悪いのはこっちだし」

「でもあれはやりすぎだったよ。今更遅すぎるかもしれないけど本当にごめん」

健太郎は急いでかぶりを振った。

「そんなに謝らないで。こちらこそひどいこと言ったりしてごめん。俺も鈴木さんがまだ俺のこと怒ってるんじゃないかと思ってた」

「私だってそんなに執念深くないわよ」

それからというもの、地雷が取り除かれた草原を自由に走り出したように、私たちの会話は弾みに弾んだ。まるでそれまでの時間を取り戻そうとするかのように、お互いのことを話し合った。気づくと一次会の終わる時間が来ていた。

「鈴木さん二次会行く？」

少し離れた所から、二次会はカラオケに行きまーす、という幹事の声が聞こえる。

「私歌下手だしいいや。それに帰りが遅くなるとお父さんがうるさそうだし。五十嵐君は？」

「俺も行かない。明日の朝早いんだ。それにしても今日は鈴木さんと話せて楽しかったよ。ありがとう。」

「私も楽しかった。正直言って五十嵐君がこんなに話しやすいとは思わなかったよ」

「マジで？そんなこと言われたことないから嬉しいな」

久しぶりに沈黙が私たちの間に横たわる。幹事がまだつまらない挨拶が続いている。元クラスメートたちのほとんどがそれに耳を傾けていた。中には野次を入れている人もいる。しかし私はそんなものを聞いてはいなかった。たぶん、健太郎も。

「あのさ、携帯のアドレスと番号教えてくれない？まだ話し足りないからさ、また今度ご飯でも食べに行こうよ」

幹事のスピーチが終わり、みんなが店を出始めたとき、健太郎が早口で言った。

「うん、いいよ」

ちよつと待って、とバッグから携帯電話を取り出そうとしたが、バッグに携帯がない。その時になってようやく、だいぶ前から待ち構えるように携帯を握りしめていたことに気づいた。私は急いで赤外線通信の画面を呼び出した。

その日家に帰ってからというもの、私は携帯をちらちら見たり、受信メールを無駄に多くチェックするようになった。食事に行こうというのは社交辞令だったのではないかという考えが頭をもたげる

度、仕事でミスをしそうになった。

成人式から一週間後、ようやく初めて食事に誘われた。ひよつとして成人式のときのように会話が盛り上がらないのではないかと不安にもなったが、それは杞憂に終わった。

それからまたたび遊びに行ったり食事に行ったりして、五度目のデートの時に告白されて付き合い始めた。付き合い始めてから四年以上経つが、健太郎と一緒にいて退屈に感じたことはない。喧嘩も何度かしたが、たいてい二、三日もすれば仲直りしてしまう。なんとなく、私たちはずっと一緒にいるんだろうな、と思うことがあった。健太郎と付き合うまでに三人の男と付き合ったが、そんな風に思えるのは健太郎が初めてだった。

2章

健太郎は小学校のアルバムだけでなく、中学と高校の卒業アルバムも見たいと言いつ出した。中学校は同じだったので特に隠す意味もないが、高校のアルバムを見せるのは少し恥ずかしかった。知っている人がほとんどいないにもかかわらず、健太郎は私よりも熱心に高校のアルバムを見ている。

卒業アルバムには一人ずつの顔写真が三年生の時のクラスごとに載っており、一つのクラスにつき二ページが与えられている。このページに載っている写真と一緒に大学受験や就職活動用の写真も撮ったので、みんなおとなしい髪形や化粧をしている。私もその例外ではない。といっても私は今も昔も特に目立たないファッションや髪形なので、今と大して変わらない。口に出しては言わないが、私は二十五歳にして今も超ナチュラルメイクでいられることをひそかに自慢に思っている。トイレでファンデーションや口紅をこれでもかと塗りたくっている人を見るとああかわいそうに思う。

健太郎は顔写真を一人ずつ丁寧に見ては、「あつこの子かわいい」とか「こいつモテたでしょ？」などとコメントを添えている。あまりにも高校生の写真をじっくり見ているので、この人年下好きなのかしらと少し心配になる。

ようやくすべてのクラスを見終えると、健太郎はアルバムを閉じた。

「でもあれだな、写真見ると結構かわいい子いるけど、やっぱり智美が一番だな」

健太郎がこんなくさいセリフを吐くことは今までになかったので、私は少し狼狽した。

「なにそれ。私よりかわいい子なんていくらでもいるでしょう。おだてても何も出ないよ」

うるたえているのを覺られないよう、できるだけおどけた調子で

返す。

「誰も顔だけになんて限ってねえよ」

「えっ」

今までに見たこともないような目で健太郎は私の目をまっすぐに見つめてくる。いつもなら冗談でも言って目を伏せるところだが、今はそうはいかない。ドラマ撮影の本番が始まったかのように、さっきまでとは部屋の空気が違っている。健太郎の視線はなかなか私の目を解放してくれない。

「俺にとってはすべての面でお前が一番だって言っただ」

「と、突然どうしたの…」

「結婚しよう」

健太郎が緊張しているのがわかる。耳を澄ませれば彼の心臓の鼓動まで聞こえてきそうだ。だが実際に聞こえるのは、初夏のまだ控えめな蝉の鳴き声だけである。

「……智美？」

「えっ、あっ」

名前を呼ばれ、ようやく私は思考が停止していたことに気づいた。あまりにも突然なパスを受け、私はボールをキャッチし損ねていた。事態を察知してようやく心臓が速く動き出し、少し遅れて脳が「プロポーズ」という単語をはじき出した。

「なんで、そんな突然」

ずっと真剣な顔をしていた健太郎が、久しぶりに白い歯をのぞかせた。

「ごめんごめん。まさかそこまで驚かれるとは思わなかったよ。でも」

健太郎はふう、と息をついで続ける。すでに真剣な面持ちに戻っている。

「俺にとっては結構我慢したつもりだよ。もう五年近くも付き合ってるわけだし、ずっと前から感じてたんだ。ああ、きっと結婚ってこういう人とするんだなって」

私は言葉を差し挟むことができない。次を促すようにただ軽く頷いた。

「普通プロポーズって、凝ったサプライズとか給料の三カ月分の指輪とかを用意して、お互いの記念日にするものなのかもしれない。でもそういうことはどうでもいいっていうか…ただ俺はずっと智美のそばにいたいだけなんだ。そう思ってたら我慢できなくて…普通の準備とかせずにプロポーズしちゃった。だからもう少し待ってくれって智美が言うなら俺は待つし、OKしてくれるなら今すぐにも指輪を買いに行く」

健太郎は息を吞んで私の返事を待っている。私はようやく正常な思考回路が復活し、どうしようかと考え始めていた。

考えずとも結論はわかっている。私は健太郎と結婚したい。言われたのが唐突すぎたために初めは混乱していたが、今はすでに健太郎のさっきの言葉が私の心に沁み込んでいる。健太郎と同じように私も、この人とずっと一緒にいるのだろうなと感じたことが幾度となくある。私の場合はたまたま結婚という単語とは結び付かなかったが、結婚と言われてみると「そうそう、私もそう思っていたの」と合点がいく感じがする。

健太郎は高校の教師をしており、決して多くはないが安定した収入がある。もし私が結婚によって今の仕事を辞めることになっても二人分の生活くらいには困らないだろう。

二人の気持ちもOK、金銭面もOKときたらあとはプロポーズを承諾して抱擁のひとつでも交わすのが普通だろう。だが私には一つだけ気がかりなことがあった。

「あの…」

私が言葉を発するのを待ち構えていた健太郎は、若干前のめりになっただけ一言も聞き漏らすまいと耳を傾ける。

「私も健太郎と同じ気持ちよ。健太郎と結婚するだろうなって前から感じてたし、健太郎がそう言うってくれるなら今すぐにも結婚して一緒に暮らしたい」

健太郎がほつとしたように頬を緩める。

「でも」

幸せそうな顔を見せていた健太郎は、えっまだ続きがあるの、と言いたげな表情に一変した。

「一つだけ心配なことがあるの。自分で言うのもなんだけど、私つてずっとお父さんに大事に育てられてきたでしょう。今もまだ一緒に暮らしているし。お父さんはたぶん私のことをまだ子供扱いしているし、溺愛していると思うの。ボコボコにされた健太郎ならわかると思うけど」

昔お父さんの親バカぶりを身をもって経験した少年は、小刻みに何度も頷いている。

「私が心配なのは、そんなお父さんが結婚を許してくれるかってこと。あと、結婚は許してくれても二人で住むのを許してくれるかどうかだね。私はせっかく結婚するなら二人で暮らしたいし。私たちはハタチ越えてるからお父さんが許可しなくても一応結婚できるんだろうけど、私はきちんとお父さんに納得してもらいたいの。なんだかんだで今まで散々お世話になったからいい加減にはできないわけだから、お父さんにまず会ってもらって、それからでないとプロポーズの答えは出せない」

表情がコロコロ変わっていた健太郎は私の話を聞き終え、プロポーズ時の真剣な顔に再び戻って言った。

「そうだな。親父さんに見てみたら智美は大切な一人娘なんだし、納得してもらわずに勝手に結婚するんじゃあ親不孝だよな。とりあえず今度親父さん……じゃなくてお義父さんに時間作ってもらってきちんと挨拶しよう」

「よかった」

「何が？」

「あなたがお父さんのことをいい加減に扱わない人で。これでもし、うるせえ親父なんか関係ねえ、駆け落ちするぞなんて言われてたら別れてるところだったわ」

「今時そんな奴いるかよ」

健太郎はようやくいつものようにどつと笑った。

男はそれくらい強引な方がいいって子もいるのよ、とひとしきり笑いあつた後、健太郎は続けた。

「でもごめんな。普通親に挨拶するなんて当たり前なのに、俺それすら忘れちゃつてた。ほんと俺頭悪い。でも頭悪いなりにきちんと挨拶して、お義父さんに納得してもらつまで絶対諦めないから。たとえ何度ボコボコにされてもな」

言つて、少し恥ずかしそうにしながら健太郎はにこつと笑った。

私はやつと気づいた。今までこの笑顔を見るたびに私はますますこのひとを好きになり、ずっと一緒にいたいと感じていたのだ。きつとこれからもそれは変わらない。

「あつ」

「なによ？」

「じゃあ指輪もお義父さんの許しが出てからでいいよな？実はまだ金貯めてる最中なんだ」

申し訳なさそうに健太郎が言う。

「なによ、さつきは今すぐにも買いに行くとか言つてたくせに」
ふたりで声を上げて笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2900h/>

四十九日

2011年1月19日03時34分発行